

聖書箇所：第一サムエル記 27 章 1～7 節

説教題：願いをかなえてください

ダビデはサウルの手からのがれるために荒野をさまよっています。しかし、どこに隠れていようともダビデの居場所をサウルに密告する者が現れます。サウルは三千人の兵を率いてダビデを殺そうと出陣します。ダビデがその事に気がついたときはすでに手遅れでした。逃げ道がふさがれ、このままでは全員殺されてしまう。そんなとき、ダビデはいのちをかけてサウルの大軍の中に入り込み、サウルの枕元にあった槍と水差しを持ち出すことに成功します。

朝になったとき、ダビデは丘の頂に立ち、サウルに向けて叫びました。「私が何ををしたというのですか。私の手に、どんな悪があるというのですか。」これを聞いたサウルは、「私は罪を犯した。」「私はもう、おまえに害を加えない。」サウルはこの時本心からそう思ってこう告白したと思うのです。その証拠に、サウルはダビデの前から兵を引き上げました。こうしてダビデは危機一髪のところまで救われました。

1 ペリシテ人の地にのがれるダビデ

(1) サウルの心

しかしこれで問題がなくなったわけではありません。1節でダビデはこんなことを考えています。「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。」

これはどういうことか。ダビデはサウルの告白を額面どおりに受け取っていないのです。というのは、以前にも同じようなことが

あったからです。ダビデがほら穴に隠れていたとき、そこへたまたまサウルが休むために一人で入って来たことがありました。サウルはなにも気がつかないままほら穴を出て行く。ダビデがあとからあとを追い、サウルに今ほら穴で何があったかを告げる。それを聞いたサウルは、「私は悪いしうちをした」と言って涙を流して泣いた。そう言っていたのに、しばらくするとまたものようにダビデを殺すために兵を差し向けていった。そんな苦い経験を何度もしていますから、ダビデは簡単にサウルのことは信用できません。いずれまた、ダビデの隠れ場所を密告する者が出て来て、サウルは自分を追いかけてくる。というのは、イスラエルの国中の至る所に看板が立てられていたからです。西部劇ふうと言えばこんな看板です。「お尋ね者ダビデ 生死に関わらずその首を差し出した者には報奨金〇〇万ドル」

もはやイスラエルには安住の場所はありません。どこへ逃げようとも、サウルは見つけ出します。ではどうするか。

(2) ぎりぎりの選択

ダビデは悩んだ末に一つの決断をします。ペリシテ人のところへ逃げ込むことにしよう。今のことばで言えば亡命です。しかしそこには大きな問題がありました。

ダビデはかつてサウルの下で働いていたとき、ペリシテ人を相手に何度も戦っていたのです。自分たちをひどい目に遭わせたダビ

デ。そのことをペリシテ人が忘れるはずはありません。逃げ込んだのはいいけれど、殺される可能性が高いのです。どう考えてもあまりにも危険です。ダビデはもちろん承知しています。悩みます。イスラエルに残るか、ペリシテ人の領地に逃げ込むか。天秤にかけます。どちらも危険がいつばい。しかしそれでもごくわずかですが、ペリシテ人の領地に逃げ込むことのほうが生き延びられる可能性がある。そう考えます。何を根拠にしてそう思ったのでしょうか。

2 ツイケラグの町へ

(1) アキシユの魂胆

そのことをアキシユの側から考えていきます。アキシユはダビデが目の前に突然現れたのを見て驚きました。いったい何をしに来たのか。ダビデは亡命させてくれと言っているが、これは怪しいとを考えます。亡命するふりをして、自分たちを攻めるためにやってきたのではないか。ダビデをまず疑います。厳重な取り調べをします。しかし疑わしいものは見つかりません。アキシユは少し警戒レベルを下げ、頭の中で計算を始めます。

この男とは以前戦ったことがあるが、確かに優れた能力を持っている。ここでダビデを殺す事は簡単だが、うまくダビデを利用することができるのではないか。さて、どんなふうにダビデを料理しようか。

(2) 身を低くしながら

実は、ダビデが最後の切り札として考えていたことはその事でした。アキシユはダビデを殺さず、利用しようとするに違いない。

そのことを頭に思い描きながら、ダビデはこう願い出ました。5 節。「もし、わたしの

願いをかなえてくださるなら、地方の町の一つの場所を私に与えて、そこに住まわせてください。どうして、このしもべが王の都に、あなたといっしょに住めましょう。」

ダビデが、地方の町に住まわせてくれと願った事情についてはまた次回触れる予定です。結論から言えば、ダビデのこの申し出はアキシユにとって願ってもないことでした。

それはひとまず置いて、ダビデは、「アキシユと同じ町に住むなど恐れ多いことでございます」と願ったとき、ダビデはどんな姿勢だったのか。そこに目を留めましょう。彼は身を低くしています。地に頭をこすりつけて、命乞いをしています。かつてダビデは、イスラエルでは人もうらやむほどの力と名声を勝ち得た人でした。イスラエルの次の王様はダビデではないのかと、人々が噂するほどでした。そのダビデが今はこんな有様です。イスラエルの宿敵であるペリシテ人の将軍に対して頭を下げる。こんな屈辱的なことはありません。でも、ダビデたちが生き延びるためにはそれしか方法はありませんでした。

(3) 女奴隷ハガル (創世記 16 章 9 節)

実は、聖書のなかで「身を低くして生き延びる」というテーマは何度も繰り返されています。創世記にアブラハムという人が出て来ます。妻であったサラのもとにはハガルという女奴隷がいました。ハガルはアブラハムの子を身ごもります。しかしサラには子どもが生まれません。いつの間にかハガルは女主人サラを小馬鹿にし始めます。これに起こったサラは夫のアブラハムにお願いしてハガルを追い出してしまいます。荒野に追われてしまったハガルはどこにも行くあてはない。こ

のままでは死ぬしかありません。そんなとき
主の使いが現れ、ハガルにこう言うのです。

「あなたは女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい。」ハガルはこのことばに従い、生き延びていきます。

ダビデもハガルも状況は違うけれど生き延びるために何をしなければならなかったか。憎い敵に対し、地に頭をこすりつけてお願いするしかなかったのです。

3 どうして私が頭を下げなければならないのか？

どうして神はハガルにもダビデにも屈辱的と思えることをさせるのでしょうか。私たちがダビデであればこう思うはずです。

「いったいどうして私はこんな目に遭わなければならないのですか。どうして、私が敵の將軍アキシュに頭を下げなければならないのですか。私が何か悪いことをしたのですか。こうなったのは全部サウルのせいではないですか。それなのに、どうして神様は私に頭を下げろと言うのですか。アキシュに頭を下げるのがどんなに屈辱的なことか、神様わからないのですか。頭を下げるべきなのはサウルであって、私ではありません。」

ですから私たちは神様にこんなふうに願うはずです。「神様。どうか私が頭を下げなくて済むようにしてください。私には頭を下げる義務も責任も何もありません。神様、私が救われるためにもっと別の道を用意してください。」敵に頭を下げるという選択肢は絶対にあり得ない。それが私たちの思いです。

ところが、主の御思いはまったく正反対なのです。たとえあなたが悪くなくても、たとえ問題を起こしたのがほかの人の責任であつても、あなたは敵に対して頭を下げな

い。そうしなければあなたは生き延びられない。それが聖書のことばなのです。

意外に思うでしょうか。あまりにも理不尽だと思いませんか。悪い者が頭を下げず、どうして正しい者が頭を下げなければならないのか。それではいったい正義はどうなるのかと、怒るでしょうか。正直に申せば、私もそう思いました。どうしてこんなことをしなければならないのか。

4 生き延びるために

私たちの主イエス・キリストはどうだったのでしょ。この方はどんな道を歩まれたのでしょうか。ダビデがたどった道と主イエスが歩まれた道、比べてみると驚くほど似ています。二つのことが言えると思います。

(1) 追い出されるイエス

まず一つ目。ダビデは、自分の国であるイスラエルの中に留まることができず、追い出されていきます。そして、ペリシテ人の地に追い込まれていきました。イエスはどうか。ヨハネの福音書1章11節にこうあります。「この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」

イスラエルの王である方が、ご自分の国から追い出され十字架につけられてしまいます。その十字架にはこんな札が貼られました。「ユダヤ人の王イエス。」この地上にはこの方の生き延びられる場所がなかったのです。十字架だけがこの方の居場所ではなかった、と言ってもいいでしょう。十字架だけが、この方が王であると名乗ることのできる場所でした。

(2) 身を低くする

イエスとダビデが似ている二つ目。

ダビデは、家族や六百人の仲間達が生き延びることができるようにと、アキシュの前で頭を地面にこすりつけ、身を低くしていきましました。アキシュはそれを見て、ダビデを受け入れます。そうやって何とか生き延びられる道が開かれました。

主はどうされたのでしょうか。この方が十字架に追いやられたとき、イエスは私たちをののしったのでしょうか。いや、ののしっていたのは私たちのほうでした。怒りの叫び声、侮辱する笑い声、イエスの真似をしておどける者、いろいろな声を聞きながら、この方は何をしていたのでしょうか。私たちが生き延びられるようにと頭を下げていました。父なる神様に向かって、祈っておられた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

イエスはこう語っておられるのです。「父よ。彼らをお赦してください。あの人たちは確かに悪いことをしています。でも、その責めを彼らに負わせないでください。あの人たちを責めるのではなく、その代わりに、このわたしを責めてください。わたしはあの一とたちの身代わりとなって、あなたからのさばきを受けますから、ですからどうかあの人たちの罪をお赦してください。」

そう言って、イエスは地に頭をこすりつけ、私たちが生き延びられるようにと身を低くしてくださっていた。それなのに、私たちはそんなことなど知ろうともしないで、言い張っていたのです。「どうして私が頭を下げなければならないのか。悪いのはあいつだ。」

自分が頭を下げるなんて理不尽だと怒る前に、主が私たちのために何をしてくださっていたのか。理不尽なことだと怒る前に、主

が私たち以上の理不尽な苦しみを静かに引き受けていてくださっていた。

そのことを思い起こしたいと願います。